

スミルノフの日本語文法書

—露都創刊日本語典・再考—

高橋知也 (チャナツカレ・オンセキズ・マルト大学)
wra400104080@hotmail.com

【要約】

あまり研究のされていない Smirnov, Dmitrii 著の日本語文法書 “Rukovodstvo k izucheniiu iaponckogo iazyka” (1890) を取り上げ、スミルノフが自ら挙げている参照文献との関連を章立て構成と助数詞の扱いの面で検討した。その結果、章立て構成については Aston(1873)と Imbrie(1880)双方からの影響が見られること、助数詞については Aston(1873)と Imbrie(1880)に収められているものだけでなく、独自に採録したと思われる語も見られることがわかった。

1. はじめに

本稿で検討の対象とする文献はロシア連邦・極東連邦大学古文書館所蔵の Smirnov D. 著 1890 年刊 “Rukovodstvo k izucheniiu iaponckogo iazyka” で、書名の和訳は『日本語学習指導書』(下瀬川・堤・山下 2001:48)あるいは『日本語研究手引』(吉町 1977:405)とされているものである。稿者は 1999 年から 2001 年にかけて同大学に赴任していた間に本書を複写する機会を得た。同書は国立国会図書館サーチや CiNii で検索しても見つからないことから、日本国内の図書館には所蔵されていない可能性が高い¹。

日本語教育史に関するあらゆる要素を体系的に網羅した入門書である関(1997:4)には、同書の執筆目的について、「日本語教育の歴史の中から、こうした日本語教育・教師のあり方を考えるための指針を得ることにあるのであって、単に過去の日本語教育の史実を連ねるものではない」とある。稿者も本書を巡って研究を進めることにより、何らかの指針を得ることを目標にしたい。

本書は吉岡(2000)の分類に従うと「文典型教材」、すなわち、日本語学習者に対し主として文法を中心に日本語を体系的に理解させる目的で作成された教材である。

2. 先行研究

この文献の先行研究としては、吉町(1977)に解題および序文の和訳が、同(1987)に全体の要約と収められている例文についての考察がある。また、Alpatov(1988)はロシア・ソビエトの日本語研究の発展における本書の位置付けを試みている。

吉町(1977:405)における原著者の紹介は以下の通り(引用文内における固有名詞等のロシア語表記は省略、以下同)である。

ドミートリー ドミトリエーヴィチ スミルノーフは一八五五(安政元)年生れの文士で露都神学校第二学年で僧籍に入って牧師に任ぜられ、日本で二年間伝道して日本語を研究したが、一八九二(明治二五)年自発的に僧籍と牧師職を離脱した。多

くの教会讃美歌をスラブ語から日本語へ翻訳した外に、出版したのは日本語研究手引、露都、一八九〇年／日本大津市「畑」一八九一年、第二〇号／復活祭へ／巡礼者、一八九六年及一八九七年、三月四月／病弱なイオアン マトヴェーヴィチ ヴヌコーフとその幸福な最後、露都、一九〇〇年等がある。歿年不明。

上の引用について検討すると、まず、生年の 1855 年は安政元年ではなく、安政 2 年である。「露都」はサンクトペテルブルグを指す。また、「牧師」とあるが、正教会の信徒であるので「修道司祭」とするのが適当である。本書以外の著作については未見であり、どこかに所蔵されているかどうかも確認できていない。

吉町(1977:423)には「文典の扉内容写真は芬蘭首都大学図書館本から撮り」とある。また、同(1987:575)には「天理図書館所蔵写真」とあるが、その注には「吉町所蔵マイクロフィルムから撮った」とある。それで、同氏は本書をフィンランドで複写しており、そこから撮られた写真が天理図書館には所蔵されている可能性がある。

Alpatov(1988:15-21 和訳 1992:14-19)は本書を「ロシア最初の日本語文法書」として紹介し、以下のような点を指摘している。

- ・日本語の文法書を書こうという著者の学問上の関心を認めようとしなない修道僧たちとの衝突が、後に俗界に戻った理由の一つとなったと考えられる。
- ・著者が資料として使用した W. G. アストンの文法書と比較すると、いくつかの面で独創的な解釈を提示している。
- ・著者は自分が日本で実際に出会った古文章語からの借用を多く含む口語の一種を記述している。
- ・総体的に言って、本書はその時代の東洋諸言語の実用文法書の流儀で書かれている。「エキゾチックな」言語の特殊性は規範からの逸脱と見なされた。
- ・しばしば日本語の実際の特質を考慮に入れた客観的な記述をしている結果、著者は時代に先んずるような興味深い観察をしている。
- ・本書の音声の部門はいちばん意義が薄い。
- ・本書の日本語の敬語に関する記述は特に独創的である。

3. 著者が参照した資料の検討

スミルノフが本書執筆のために利用した資料について検討し、章立て構成、助数詞の扱いについて比較した。

3-1. 参照文献の詳細

本書の序文(p. XV)によると、原著者が日本に滞在したのは 1881(明治 14)年から 1883(明治 16)年にかけての一年半である²。そして、ロシアへの帰国後 4 年をかけて 1887(明治 20)年にノヴゴロドで本書を完成し、その 3 年後、1890(明治 23)年にサンクトペテルブルグで出版した。

著者が参照した資料に関する序文(p. XVI)の記述を吉町(1977:421-422)の日本語訳から引用する。

我々の手引作成に当って、個人的試作と曾ての日人教師達、特に尊敬するハナザカ チカイと敬愛するタカタ ナオカタとミナモト セキネの教示の外に、我々は仏語での此の種最新著書の中で多くの優れたものを利用したが、それらの中でも著者たちへの有難い感謝を以て特に次のものを此処に挙げねばならぬ事を言う必要があると思う。

Handbook of English-Japanese Etymology. By William Imbrie. Tookiyo, 1880

A Short Grammar of the Japanese spoken Language. By W. G. Aston, M. A. Third edition, London. (発表者注:1873)

A Japanese-English and English-Japanese Dictionary. By J. C. Hepburn. M. D. LL. D. Second Edition. Shanghai, 1872.

上の引用を見ると、滞日中に日本人教師から日本語を習い、さらに、フランス語の文献を参照したとあるが、「仏語での此の種最新著書」については未詳である。

これらの参照文献について Alpatov(1988:16 和訳 1992:15)は「彼が使用した資料を見ると、スミルノフは日本に出ていた文法書に暗かったようである」と評し、「スミルノフが用いたのはわずか2冊の和英の辞書と W.G. アストンの文法書のみで、このことをスミルノフは序文に述べている」と続けている。しかし、原著者の滞日期間が 1881 年から 1883 年にかけてであることを考えると、必ずしも日本に出ていた文法書に暗かったとは言えないように思う。また、Imbrie(1880)は辞書ではなく、本書と同じく文典型日本語教材(吉岡 2000)である。

スミルノフが挙げた参照文献の著者である Imbrie、Aston、Hepburn の三者について、『デジタル版 日本人名大辞典+Plus』(Kodansha 2009)から下に引用し、それぞれの著書についてまとめておきたい。

・インブリー Imbrie, William

1845-1928 アメリカの宣教師。

1845 年 1 月 1 日生まれ。アメリカ長老派教会から派遣され、明治 8 年(1875)来日。日本基督(キリスト)一致教会(のち日本基督教会)の成立に寄与。10 年(発表者注:1877)創設された東京一致神学校(現明治学院大)の教授。日本基督教会規則の制定などに尽力した。大正 11(発表者注:1922)年帰国。1928 年 8 月 4 日死去。83 歳。ニュージャージー州出身。プリンストン神学校卒。

1880 年刊“Handobook of English-Japanese Etymology”は 1884 年に初版の増刷がされたようであり、1889 年には巻末に読み物を加えた第二版が出版されている。

・アストン Aston, William George

1841-1911 イギリスの外交官, 日本学者。

1841 年 4 月 9 日生まれ。元治(げんじ)元年(1864)駐日イギリス公使館通訳として来日。長崎領事, 朝鮮総領事, 駐日公使館書記官などを歴任, 明治 22(発表者注:1889)年退官。1911 年 11 月 22 日死去。70 歳。アイルランド出身。クイーンズ大卒。著作に「日本文語文典」「日本文学史」など。

“A Short Grammar of the Japanese spoken Language”は『口語文典』として知られており、初版が 1869 年に、多少の増補をした第二版が 1871 年に出版された。1873 年の第三版は第二版とほぼ同じ内容であるが、第四版(1888)になると大いに改訂増補されている。

・ヘボン Hepburn, James Curtis

1815-1911 アメリカの宣教師, 医師, 語学者。

1815 年 3 月 13 日生まれ。安政 6 年(1859)長老派の宣教師として来日, 横浜にすみ, 診療と英語教育をおこなう。慶応 3(発表者注:1867)年日本初の和英辞典「和英語林集成」を出版, この第 3 版にもちいられたローマ字がヘボン式ローマ字として日本で普及した。明治 22(発表者注:1889)年明治学院初代総理, 25(発表者注:1892)年帰国。1911 年 9 月 21 日死去。96 歳。ペンシルベニア州出身。ペンシルベニア大卒。

“A Japanese-English and English-Japanese Dictionary”は一般に『和英語林集成』としてよく知られており、1872 年に出版されたのは第二版である。初版は 1867 年で、第九版まで版を重ねたが、第四版(1888)以降は若干の誤植訂正がみられるだけで第三版と同じ内容である。

3-2. 章立て構成の比較

本書は、表紙-扉-目次 4 頁-序文 16 頁(ローマ数字)-本文 419 頁(算用数字、全 13 章)-正誤表 2 頁から成るが、発表者が複写した極東連邦大学所蔵本は第 1 章(pp. 1-22)の部分が欠落している。

前節で言及した三つの主要な参照文献のうち 2 点(Imbrie 1880、Aston 1873)は本書と同じく文典型日本語教材(吉岡 2000)である。そこで、本書の成立過程を見るため、三つの文献の章立て構成を対比して、表 1 にまとめた。

表 1 本書及びその参照文献における章立て構成の一覧

Aston(1873)	Imbrie(1880)	Smirnov(1890)
1. アルファベット-発音 The Alphabet - Pronunciation	1. 音節表 The Syllabary	1. 序章 Vvegenie
2. 名詞-助詞 Noun - Particle	2. 動詞 The Verb	2. 動詞 Glagol
3. 代名詞 Pronoun	3. 名詞 The Noun	3. 名詞 Imia sushchestvitel'noe
4. 数詞 Numeral	4. 代名詞 The Pronoun	4. 代名詞 Mestoimenie
5. 形容詞 Adjective	5. 代名詞的形容詞 Pronominal Adjectives	5. 形容詞 Imia prilagatel'noe
6. 動詞 Verb	6. 形容詞 The Adjective	6. 尊敬の接頭辞 Pochetnye pristavki
7. 副詞 Adverb	7. 副詞 The Adverb	7. 副詞 Narechie
8. 前置詞 Preposition	8. 数詞 The Numeral	8. 数詞 Imia chislitel'noe
9. 接続詞 Conjunction	9. 前置詞 The Preposition	9. 後置詞 Poslelog
10. 間投詞 Interjection	10. 接続詞 The Conjunction	10. 接続詞 Soiuz
11. 語順 Order of Words in a Sentence		11. 間投詞 Mezhdometie
12. 時間 Division of Time		12. 語順 Slovoraspolzhenie
13. 貨幣、度量衡 Money, Weights and Measures		13. 日本の度量衡・貨幣・計時 Iaponskiie mery, ves, monety i vremiaschislenie
14. 日本語を話す際の共通の誤り Common Errors in Speaking Japanese		

表 1 を見ると、スミルノフは「1. 序章」から「10. 接続詞」までは Imbrie(1880)に倣い、「10. 接続詞」から「13. 日本の度量衡・貨幣・計時」までは Aston(1873)に倣っていることがわかる。

Imbrie(1880)は「4. 代名詞」と「5. 代名詞的形容詞」を分けている。内容を見てみると、「4. 代名詞」では人称代名詞を主に扱い、「5. 代名詞的形容詞」では指示代名詞などを扱っている。一方、スミルノフはこれに倣わず、人称代名詞も指示代名詞も「4. 代名詞」として一つの章にまとめ、むしろ「6. 尊敬の接頭辞」というものを一つの章として独立させている。「6. 尊敬の接頭辞」で扱われているのは「お-」と「ご-」であるが、Imbrie(1880:71)は「4. 代名詞」のところでこれを扱っており、両者を比較すると、日本語の特徴としてこれを際立たせたスミルノフの扱いのほうが適切だと言えそうである。

「6. 尊敬の接頭辞」で Smirnov(1890:274)は尊敬語としての「お-」「ご-」(尊敬の対象が主語の場合)と謙譲語としての「お-」「ご-」(尊敬の対象が目的語の場合)を区別している。このような記述の仕方

を Alpatov(1988:19 和訳 1992:18)はかなり高く評価している。

敬語形式のさまざまな種類が分類されたのは、日本においても(三矢重松、松下大三郎)、外国においても(A. ローズ-イネス、W. M. マックガヴァン)、ようやく 20 世紀も 10 年代から 20 年代になってのみである。我が国の研究では、後述するように、D. D. スミルノフの後は半世紀以上、日本語の敬語に関する独自の研究でこれほど正確に記述したものは一つも見られない。

しかし、実際のところ Smirnov(1890:274)の記述は Imbrie(1880:71)に基づいているように見える。また、Aston も『口語文典』第 4 版(1888)では敬語について一章を設け、まとめて述べるようになっていく(古田 1974)。このことから、スミルノフの功績はロシア・ソビエトにおける先駆者にとどまると言ったほうが適切かもしれない。

本書の章立てを Aston(1873)と比較すると、アストンが「12. 時間」と「13. 貨幣、度量衡」を分けているのに対して、スミルノフが「13. 日本の度量衡・貨幣・計時」を 1 つにまとめていることに気づく。この理由は 1872(明治 5)年に日本で太陽暦が採用されたことと関係があると思われる。欧米と同じ時間の言い方が普及しつつあったスミルノフの頃には時間について取り立てて記述する必要性が小さくなっていただろう。Aston(1873)の改訂増補版である同(1888)『口語文典』第 4 版の章立てを見ても、時間・貨幣・度量衡が一つの章にまとめられている。

3-3. 助数詞の扱い

前節の終わりで時間の扱いについて述べたが、日本語の数詞表現、特に、数える対象によって様々な助数詞が使い分けられることは、日本語の特徴として外国人日本語研究者の興味をひきやすかった。そこで、スミルノフの記述している助数詞について詳しく見てみた。

まず、この「助数詞」をどう呼んでいるかに注目した。Smirnov(1890:350)は“Opisatel'nye chislitel'nye 記述数詞”という語を採用している。これは Imbrie(1880:166)の“Descriptive Numerals”をロシア語に翻訳したものと思われる。

Aston(1873:20)は“Auxiliary Numerals”と呼んでおり、このアストンの用語はその後広く受け入れられ、現代の国語学にまで引き継がれたとされている(池上 1940)。また、Hepburn(1872)は参照できなかったため同四版(1988)序文の“ORDINAL NUMBERS”の項(p. XX)を参照したところ、“Descriptive or classifying numerals”と呼んでこれを説明していた。

スミルノフの採用した“Opisatel'nye chislitel'nye”はその後引き継がれなかったようで、例えば、ゴロヴニン監修 2003『日本語教科書 改訂 3 版 第二巻 初級』を見ると、いわゆる助数詞は“Schëtnyĭ suffiks”と呼ばれている(p. 99)。

表 2 本書及びその参照文献に収められている助数詞の一覧

Imbrie(1880)	Smirnov(1890)	Aston(1873)
艘(そう) / 匹(ひき) / 羽(わ) / 人(にん・たり) / 本(ほん) / 枚(まい) / 軒(けん) / 杯(はい) / 足(そく)		
挺(ちょう) / 冊(さつ) / 量(じょう) / 部(ぶ)		—
—	幅(ふく) / 通(つう) / 個(か) / 献(こん) / 箇(こ)	戸前(とまい)

本書及びその参照文献に収められている助数詞の詳細を表 2 にまとめた。原文はいずれもアルファベット表記のみのなので、漢字は稿者が補ったものである。内訳は、三文典共通の助数詞が 9 つ、Imbrie(1880)と Smirnov(1890)の二文典に共通の助数詞が 4 つ、Aston(1873)独自の助数詞が 1 つ、

Smirnov(1890)独自の助数詞が5つであり、Smirnov(1890)はImbrie(1880)の助数詞をすべて網羅した上に独自の助数詞も多く収録していることがわかる。

スミルノフ独自の助数詞について、Hepburn(1888)で調べてみたところ、いずれも収録されていることが確認できた。

Fuku フク 幅 The numeral for pictures, maps, etc.: *kakemono ippuku*, one picture (p.92)

Tsu ツウ 通 n. An numeral used in counting letters, documents, etc.: *tegami ittšu*, one letter; *ni tsū*, two letters. (p.682)

Kon コン 獻 Numeral for glasses of wine, as: *sake ikkon*, one wine-glass full of *sake*; *ni-kon*; *san-kon*. (p.328)

Ko コ 箇 n. A numeral for persons, tables threads, as: *ikko-jin*, one individual; *ikko no tsukue*, one table; *hito ko*, one strand; *futa ko*, two strands. (p.314)

Ka カ 個 A classifier for periods of time, and countries: *ikka tsuki*, one month; *ni ka tsuki*, two months; *san ga koku*, three provinces; *san gas sho*, three places (p.236)

4. まとめ

本稿では日本国内の図書館で所蔵が確認されていない文献である Smirnov D. 著 1890 年刊 Rukovodstvo k izucheniiu iaponckogo iazyka について考察した。

本書にはキリスト教の聖書から取られたと思われる例文がある。

Mimi arite kikoiuru mono va kiku besi. (p.87)

Ta nin kara site morai tai koto va, dzi-bun mo ta nin ni si muke nasaI. (p.90)

宗教的な使命を帯びて渡日したにもかかわらず二年足らずで帰国し、周囲の理解が得られぬまま文法書を出版したものの後に僧籍と聖職を離脱することになるスミルノフの歩みは、日本初の本格的和英辞典を発行し、聖書の日本語訳完成に当たったヘボンの歩みと対照的であるように思える。

今後、本書の背景を掘り下げるため、日本における正教会のスミルノフと同時代の活動に関して調べたいと思っている。

参考文献

池上禎造(1940)「助数詞攷」『国語国文』10巻3号, 1-27.

下瀬川慧子・堤正典・山下万里子(2001)「『ロシア・ソビエトにおける日本語研究』(V. M. アルパートフ著)索引およびロシア語文献和訳」『東海大学紀要留学生教育センター』21号, 33-52.

関正昭(1997)『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク

古田東朔(1974)「アストンの敬語研究」『国語学』96号, 1-15.

吉岡英幸(2000)「明治期の日本語教材」木村宗男先生米寿記念論集刊行委員会(編)『日本語教育史論考』, 凡人社, pp.13-25.

吉町義雄(1977)「露都創刊日本語典」近代語学会(編)『近代語研究第五集』, 武蔵野書院, pp.400-424.

吉町義雄(1987)「露都創刊日本語典の文例」近代語学会(編)『近代語研究第七集』, 武蔵野書院, pp.562-576.

Alpatov, V.M.(1988)Izuchenie iaponskogo iazyka v Rossii i SSSR, Moskva:Nauka. (下瀬川慧子・堤正典・山下万里子 訳 1992 ロシア・ソビエトにおける日本語研究 東海大学出版会)

Hepburn, J.C.(1888)A Japanese-English and English-Japanese Dictionary, Tokyo:Z.P.MARUYA & Co.

1 本書がインターネット上で閲覧可能だとの教示をヴォロビヨフ・ガリーナ氏より受けた。感謝してここに記したい。Google Books <<http://books.google.co.jp/books?id=rbwwAQAAMAAJ>> (2012年11月30日)

2 中村健之介訳(2011)『ニコライの日記(上)』(岩波書店)を見ると、スミルノフは1880年3月23日に日本へ赴任する前に神学大学で見送りを受けており(p.132)、1882年1月20日に翌朝のフランス船で横浜を発つことになっている(p.234)との記述がある。